クラス番号	630	担当教員名	岡﨑　浩（おかざき ゆたか）
テーマ	フィクションをとおして「ふくし」を考える		
著書・論文 研究課題等	著書：『読み解かれる異文化』松柏社、1999 年(共著)、『『アメリカの悲劇』の現在』中央大学出版部、2002 年(共著)、『問い直す異文化理解』松柏社、2007 年(共著)、『ウィリアム・スタイロンの世界』中央大学出版部、2008 年(共著)、『文学・労働・アメリカ』南雲堂フェニックス、2010 年(共著)　主要論文：「ソール・ベローの『宙ぶらりんの男』と気力の喪失」『現代と文化』第 117 号(日本福祉大学福祉社会開発研究所紀要)、「悲劇的共同体とその悲劇――アーサー・ミラーの『みんな我が息子』を読む――」『New Perspective』第 189 号（新英米文学会学会誌）「「成功の夢」悲劇の書き換え――『オーギー・マーチの冒険』第 12 章を読む――」『New Perspective』第 195 号(新英米文学会学会誌)		

ゼ ミ ナ ー ル 概 要

キーワード：「ふくし」、物語、フィクション

目的、内容、方法等：　このゼミの最大の特徴は、4 年次の「卒論」を、卒業論文ではなく、卒業制作にできることです。具体的には、「ふくし」と関わるフィクション(＝物語)を作ることで、卒論の単位をとることが可能ということです。(もちろん論文でも単位は取れます。)

ここで言う平仮名の「ふくし」というのは、2013 年 5 月 6 日の読売新聞に掲載された二木立学長のインタビューを参照していただけるとよくわかると思います。学長によると、漢字の「福祉」には、生活保護や障碍者支援といった「特定のひとのためのもの」といったイメージがあるが、一方、平仮名の「ふくし」は、それも含んだ広い意味で、「人間らしく幸せに生きるため」のあらゆる活動を含む言葉です。この角度から見ると、このゼミの卒業制作では、ゼミ生なりの「幸せについての物語」が書ければいいことになります。

このゼミでは、「ふくし」についてのフィクション(＝物語)が作れるよう、学生と教員が協力してゼミを進めます。具体的には、ひとつには、小説を題材にして、一定期間ゼミを進めます。たとえば、ある小説からは、現場の実態を知ることができるだけではなく、どうしたら上手に物語を作ることができるかも学ぶことができます(→また、たとえば、虐待などが可能なかぎり起こりにくい地域を作るためにはどうしたらいいかという問題についても、学生ひとりひとりに意見を持ってもらいたいと考えています)。また、事情がゆるせば、テレビ・ドラマや映画も題材にしたいと考えています。文章を書く作業も行って表現力の強化も目指します。またこれも事情がゆるせば、文学作品を朗読などの形式で読むことによって、優れた文章のリズムや構成などを体感してもらいたいとも考えています。

主に上述のような作業を 3 年次に行い、4 年次には、卒業制作のフィクション(＝物語)作りなどを行います。

授業計画：(ゼミ生の人数や関心によって詳細な計画は変わりますが)3 年次前期は、福祉とかかわる小説を読む作業をとおして、学んでいきます。3 年次後期は、文章を読む作業と書く作業を行います。4 年次は、卒業制作の作成が中心です。

担当教員からのメッセージ

「やるときはやる」ゼミを目指します。

レポートを拡大延長したものとも言える卒業論文が自分には書けないのではないかと不安を抱えている学生のみなさん、フィクション(＝物語)作りで卒論の単位をとることに挑戦してみませんか。(担当教員は、2013 年度は、学外研究でアメリカにいます。学習相談はメールでお願いします。)